

国立民族学博物館の収蔵品 ⑤⑤

ムエタイの展示品のひみつ

東南アジア展示場に、ムエタイ選手が立っている。本当は対戦シーンを再現したかったが、変わったポーズのマネキンは特注になるので予算が足りず、一体だけになった。

ご覧されるとお気づきになることだが、マネキンが身につけている赤いトランクとグローブには、タイ語でサインが入っている。後ろのパーティションに展示されている青いトランクやグローブもサイン入りである。だがこれらのサインについて、解説や表示はない。誰がこのサインを読んで驚いてくれたら、と密かに願っているが、何年もそんな人がいたという話は聞かない。なので、このサインのひみつをそろそろ開帳してしまおう。

赤いトランクとグローブのサインは、ルンピニー・スタジアムで三階級制覇を成し遂げた往年のスター、パーランノイ・ギエツアナン選手のものである。念のため補足したい。世界中にムエタイの団体はたくさんあり世界チャンピオンの称号をもつ人は多い。しかし、今なおムエタイでもっとも権威ある称号は、バンコクにあるルンピニー・スタジアムからジャダムナン・スタジアムのチャンピオンである。要するに、このサインはすごい選手のものである。

さて、ムエタイの試合をご覧になったことがおありだろうか。選手たちは試合前に、楽隊の演奏に合わせてワイクルーという踊りをリング上で舞う。そのあと、選手たちはコーナーポストで合掌して祈

り、頭飾りのモンコンをセコンドに丁重に外してもらってから、リング中央へと足を運ぶ。二の腕にもプラチアットという腕飾りを巻いているが、こちらは外さない。

モンコンもプラチアットも、仏僧が祈禱して呪力をこめた護符である。往時の戦争における白兵戦や古式ムエタイの試合で、頭部の安全を祈願して兵士や闘士はモンコンを巻いた。プラチアットはもともと高僧が経文と呪文と番号を記した白や赤の三角の布であった。これによって不死身にもなれたとか。

このような法力による防衛の装備の発達は、ムエタイが主に仏教寺院で継承されてきたことと無関係ではないだろう。そんなわけで東南アジア展示場でも、ムエタイ選手は仏教寺院のほど近くにいる。

(樫永真佐夫)



東南アジア展示場のムエタイ選手。頭にモンコン、腕にプラチアットを巻いている。



ラジャダムナン・スタジアム（1945年設立）でのムエタイの試合風景。リングサイドは外国人の観客が多く、タイ人のギャンブラーたちは2階席にいる。